平成27年度「全国学力・学習状況調査」の結果
ー分析から見えてきた成果・課題と今後の取組についてー

区名　住之江区

学校名　大阪市立平林小学校

学校長名　渡邊　弘彦

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成27年４月21日（火）に、６年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科も含め、総合的に子どもの学力向上を目指しています。学校の現状や取組の参考にしていただきたいと思います。

１　調査の目的

(1) 義務教育の機会均等とその水準向上の観点から、児童の学力や学習状況を継続的に把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
(2) 学校における児童への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
(3) 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２　調査内容

(1) 教科に関する調査（国語、算数、理科）

・主として「知識」に関する問題（Ａ問題）
・主として「活用」に関する問題（Ｂ問題）
※ 理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に出題

(2) 質問紙調査

・児童に対する調査
・学校に対する調査

３　調査の対象

・国・公・私立学校の小学校第６学年の原則として全生徒
・平林小学校では、第６学年　３８名

平成27年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

平均正答率は、国語・算数・理科とも全国平均・大阪市平均よりも低い結果となっている。加えて、無解答率は全国平均・大阪市平均よりも高い結果となっている。国語では「書くこと」に関しては他の領域に比べ全国平均・大阪市平均との差が小さく、「読むこと」に関しては逆に全国平均・大阪市平均との差が大きくなっている。算数では、全国平均・大阪市平均よりも低く、記述式の無解答率が３４％と高く応用的な問題に対して苦手意識が高い。理科では、知識として定着している分野としていない分野の差が大きく表れている。
児童質問紙では規範意識や学級・家庭・地域の連携については全国平均・大阪市平均を上回っている一方で、基本的生活習慣・家庭学習・論理的思考能力に課題があり、全国平均・大阪市

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

［国語］習熟度別少人数授業により、自分の考えを話す活動や、書く活動を充実させることができている。しかし、相手の話を聞くことや、文章を読み取る力に課題がある。

［算数］習熟度別少人数授業や計算等の反復練習を行うことで少しずつ定着している。一問一答の問題や計算問題に対しては全国平均・大阪平均に近い正答率を残しているが、数学的知識を活用して解いていくまでには至っていない。

［理科］選択式の問題に対しては高い正答率を示しており、記述式の問題では低い正答率になっている。与えられた中から考えて答えることはできているが、自分で考察・表現することに課題がある。

質問紙調査より

教職員が家庭と連携し、きまりを守り自己を大切にする指導を行ってきた。学校への規範意識、社会への興味関心、社会貢献に対する意識に関しては全国平均・大阪市平均より高く意識が高く保てている。
自分の考えを発表する機会があることで、自分の考えを深めたり、広げたりしながら発表することは徐々に定着してきているが、復習方法など自分で課題を見つけることができなかったり、最後まで取り組まず途中であきらめてしまうことも多いのが課題である。

今後の取組

引き続き習熟度別少人数授業を充実させるなど、基礎基本をより定着させるように取り組ませるとともに反復練習で定着させていき、学習の習慣化をより一層図っていく。保護者への啓発を図り、さらに学校からの発信と連携の強化に努めたい。
また、貸し出しや読み聞かせ等の機会を増やすなど、学校図書館を活用することで、学級での読書指導を継続して充実させる。また、国語の授業だけでなくすべての授業で根拠になる事柄を考え、論理的思考能力を養い、言語力の向上に努める。